

関東方面の近世地震と富士山噴火 ―鎌倉の事例を中心に―

令和 8 年 7 月 11 日（土） 浪川 幹夫

中世以降の関東地震について

源頼朝^{にゆうぶ}の入府以降、政権都市となった鎌倉には、『吾妻鏡』^{あずまがみ}や『親玄僧正日記』^{しんげんそうじょう}（京都の醍醐寺蔵^{だいごじ}）などに大地震と思われる記述が 9 件ほど存在する。それも南北朝時代や室町・戦国時代では希薄となるが、その後江戸時代になると、この方面での地震史料は徳川幕府^{とくがわばくふ}の公的な記録や日記類にみられるようになる。そして、この時代の当地での大きな地震は元禄^{げんろく}10 年 10 月 12 日（西暦 1697・11・25）の地震であった。

江戸時代中期に関東地方を襲った大地震は、この地震と同 16 年 11 月 23 日（西暦 1703・12・31）の元禄関東地震^{げんろくかんとうじしん}である。さらに、宝永^{ほうえい}4 年 10 月 4 日（西暦 1707・10・28）に西日本方面で宝永南海地震^{ほうえいなんかいじしん}が発生し、その 49 日後の同年 11 月 23 日（西暦 1707・12・16）から 12 月 9 日にかけて、富士山が噴火した（16 日間）。

次に、関東地方で大きな地震が集中したのは幕末頃^{ばくまつ}である。嘉永^{かえい}7 年 11 月 4 日（西暦 1854・12・23）の安政東海地震^{あんせいとうかいじしん}と同月 5 日の安政南海地震^{あんけいなんかいじしん}（「安政」の地震名称は同年 11 月 27 日の改元^{かいげん}による）、安政 2 年 10 月 2 日（西暦 1855・11・11）の安政江戸地震など、嘉永末から安政初期にかけて 8 回ほど発生した。

関東地震略年表 1 古代～中世（年月日は旧暦表記）

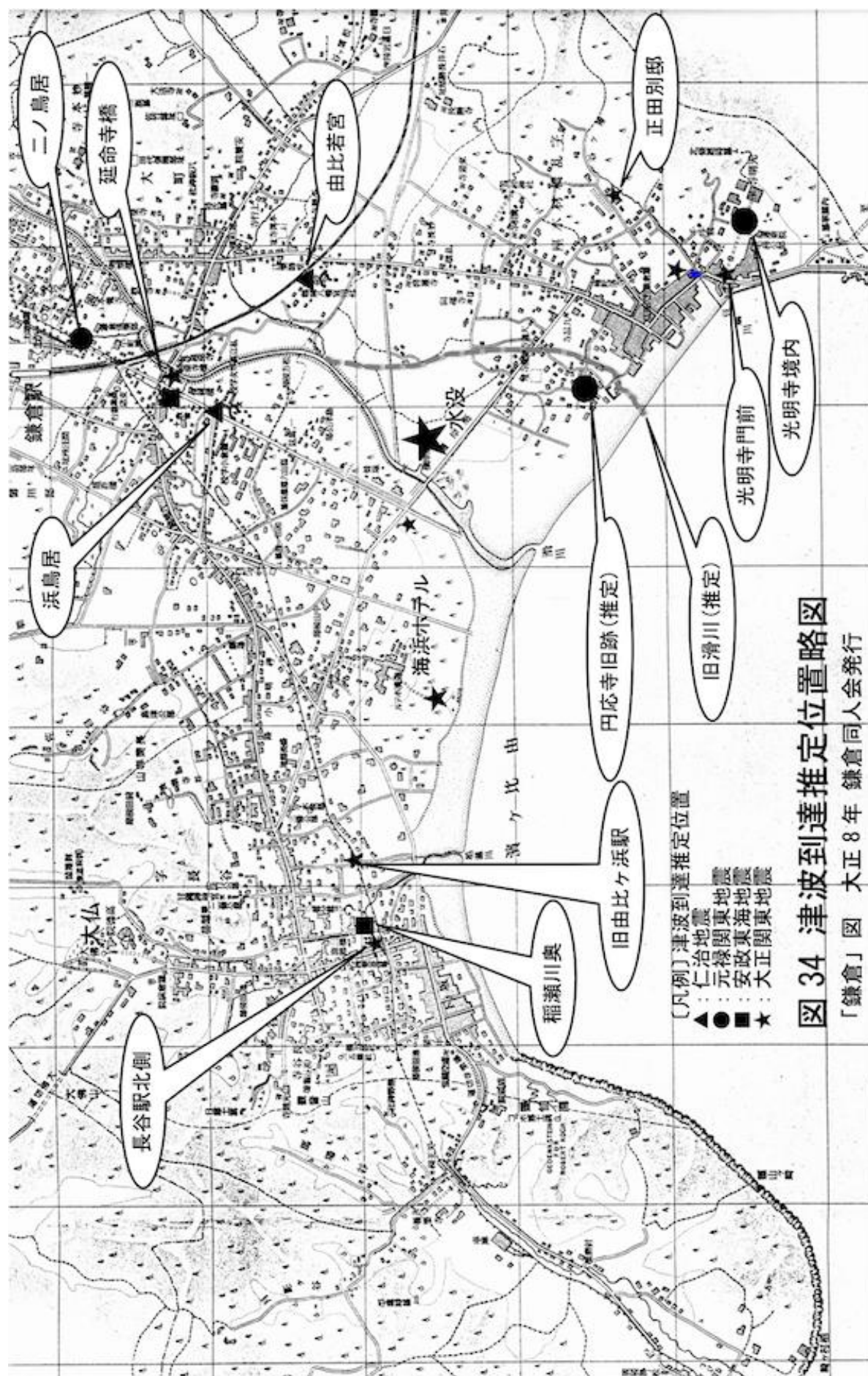
年・月・日	被災地	被害の概要
弘仁9(818).7	相模・武蔵・上野・下野等	関東で地震。山崩れで谷が埋まること数里、「百姓」の死者多数、洪水があった。「上野国等境」で被害が最大（『類聚国史』）。
承和8(841).4	伊豆	伊豆国で大地震か。里は崩壊した（『続日本後紀』『類聚国史』）。
元慶2(878).9.29	相模・武蔵 他関東諸国	相模・武蔵両国が激震地。大きい余震が数日続いた。大地陥没。圧死者多数。京都で有感地震（『日本三代実録』『類聚国史』）。
文治6(1190).3.25	鎌倉ほか	大地震（同年 9 月 2 日も「大地震」とある（『文治六年日次記』））。
建暦3(1213).5.21	鎌倉ほか	舎屋が破壊され、山が崩れ、地が裂けた（『吾妻鏡』）。
建保4(1216).1.15	江ノ島・鎌倉 ほか	江ノ島が隆起したか。地震によるものだろうか。この前に 12 回、後に 1 回「地震」や「大地震」の記述がある（『吾妻鏡』）。
嘉禄3(1227).3.7	鎌倉ほか	大地震。所々の門扉や築地などが顛倒し、地が割けた（『吾妻鏡』）。
寛喜2(1230).閏1.22	鎌倉ほか	大慈寺の後山が崩れた。大地震か（『吾妻鏡』）。
仁治2(1241).4.3	鎌倉ほか	「由比浦大鳥居内拜殿」が流失し、船十余艘が破損した（『吾妻鏡』）。
建長5(1253).6.10	鎌倉ほか	『吾妻鏡』に、近年比類ない大地震であると書かれている。
正嘉1(1257).8.23	鎌倉ほか	山岳は崩壊し、神社仏閣、民家等も皆損壊。「中下馬橋辺」では地割れを生じ、そこから炎が出た（『吾妻鏡』）。
正応6(1293).4.13	鎌倉ほか	山は崩れ、地は裂け、将軍御所を始め鶴岡八幡宮若宮等が倒壊、建長寺が倒壊後に炎上した。死者は「幾千人を知らず」と伝える（『親玄僧正日記』他）。

正和5(1316). 7	鎌倉ほか	大地震。連続地震か（『鎌倉年代記』裏書・「北条貞時十三年忌供養記」）。
暦応4(1341)3. 8 康永2(1343)4. 15／5. 6	鎌倉ほか	関東地方で、この時期「大地震」が連続したのか。鶴岡八幡宮で康永3年12月から3年にわたる修営があったので、この時の地震は鎌倉に大きな被害をもたらした可能性が考えられる（『鶴岡社務記録』）。
永享5(1433). 9. 16 【P. 8参照】	相模・甲斐・陸奥	鎌倉では築地が崩れ、極楽寺の塔が破損したほか、寺社の堂舎が顛倒し、人々が多く没したとされる。このほか、大山寺の仁王像の頸が落ち、利根川が逆流したという（同川は江戸湾に注いでいた）。同日、京都に地震の記録がある（『神明鏡』『看聞御記』『満濟准后日記』他）。
明応4(1495). 8. 15	関西・東海	津波や大仏殿の存在は不明（『鎌倉大日記』）。

関東地震略年表 2 近世～近代（年月日は旧暦表記。明治時代以降は西暦表記）

西暦	年・月・日	被災地	被害の概要
1697	元禄10. 10. 12	武蔵・相模〔鎌倉〕	鎌倉が最も激甚であったという。鶴岡八幡宮で堂社と鳥居が倒れたほか、寺社や市中の民家に被害があった（『柳営日次記』『甘露叢』他）。
1703	同 16. 11. 22	武蔵・相模・安房・上総〔鎌倉〕	【元禄東海地震】江戸・小田原・鎌倉が激甚といい、とくに津波で伊豆方面や安房、上総のほか、相模沿岸部が被災。潰家・流失家屋・死者多数。鎌倉では、「切通七口」等が各所で崩落し、当地の町屋や小坪道・江ノ島・六浦道が破損し、円覚寺・東慶寺・明月院・浄智寺・建長寺などが「大半破損」。鶴岡八幡宮に大きな被害が出たという。津波は「二の鳥井」まで浸入し光明寺ほか海浜部に被害を及ぼした（『基熙公記』『祐之地震道記』他）。
1707	宝永4. 10. 4	関西・東南海〔小田原〕	【宝永南海地震】駿河・三河・遠江・紀伊・摂津の諸国の被害が甚だしく、津波が伊豆半島から九州沿岸、瀬戸内海に及んだという。小田原にも被害があったと伝わるが、詳細は不明（『徳川十五代史』『談海並続編』他）。
	同 . 11. 23 ～12. 8	武蔵・相模〔鎌倉〕	【宝永富士山噴火】武蔵・相模・駿河の三国では、降灰や降砂のため河川や田畑が損害を受けたという。なお、鎌倉・江ノ島・藤沢ほか相模国や江戸方面に被害と復旧に関する史料がのこる（『津村腰越旧志』他）。
1781	天明1. 10. 26	関東	関東大地震。光明寺の被害は不明。〔天明紀聞〕
1782	天明2. 7. 14～	関東・甲州	大地震が数日続いた。小田原・大山・沼津・甲州筋で被害。房州辺は大津波。光明寺の被害は不明。〔天明紀聞〕
1853	嘉永6. 2. 2	相模〔鎌倉〕	【嘉永小田原地震】小田原城の天守閣で瓦と壁が落ちたという。小田原領で壊家1,000棟余り、死者24人で、鎌倉の各所にも被害の記録がある（「荻野山中藩史料」『円覚寺公私諸般留牒』他）。
1854	安政1. 6. 15	京都・伊勢他	西国で地震。潰家 3,400 余軒・死者 1,100 人。
	同 . 11. 4	東海・東山・南海諸道〔鎌倉〕	【安政東海地震】被害は沼津から伊勢に至る沿岸と、甲斐・信濃・近江・越前・加賀に及び、津波が房総から土佐までの沿岸部を襲ったため、さらに拡大したという。倒壊・焼失約30,000棟、死者は2～3,000人。金沢・三浦郡浦賀湊・同大津三崎・同大田和村・鎌倉・江ノ島・藤沢などに地震及び津波被害の記録がある（『巷街贅説』『浜浅葉日記』『藤澤山日鑑』他）。

1854	安政1. 11. 5	畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道 〔鎌倉〕	【安政南海地震】前の地震の30数時間後に発生。被害は近畿・中国・四国全部と九州・中部地方の一部に及んだという。津波は東海以西が激甚で、串本（和歌山県）で最大15mの推定高があり、死者は全体で数千人であった。三浦郡大田和村で再度津波侵入の記録があることから、相模湾沿岸部は2日にわたって津波を受けたと考えられる（『浜浅葉日記』『亀谷山記録』他）。
1855	安政2. 2 同 . 9. 28 同 . 10. 2	小田原他 江戸・相模 〔鎌倉〕	小田原地方で大地震。藤沢宿にも潰家が出る。 東海道筋各所で大地震。 【安政江戸地震】震源は江戸のほぼ直下と推定され、同所町方の被害は壊家及び焼失家屋14,346棟、死者7,000人余りに達したとされる。相模では一宮のほか厚木と藤沢にかなりの被害があり、三浦郡では上宮田の陣屋が倒潰し、ここで6名の即死者と多くの負傷者があったという。鎌倉の常盤村で民家1軒全潰か（同年10月「大地震風聞書上」『浜浅葉日記』『相州片瀬村外式番御用留』他）。なお、津波の有無については定かでない。
1856	安政3. 7. 23	東北地方	津軽・南部地方で地震。江戸で有感。
1880	明治13. 2. 22	東京・神奈川	横浜で多くの煙突が破損し、民家の壁が崩れたという。東京の被害は軽微であった。
1884	同 17. 10. 15	東京	東京及びその近郊で多くの煙突が倒壊し、煉瓦に亀裂が入ったという。
1894	同 27. 6. 20	東京・神奈川 〔鎌倉〕	【明治東京地震】東京湾北部が震源地と考えられ、東京・川崎・横浜で死者31人、負傷者157人との記録がある。東京・横浜が激甚で、鎌倉にも被害があったというが、詳細は不明である。
1895	同 28. 1. 18	茨城	茨城県南部で発生。被害範囲は関東地方東部一帯といい、死者6人、建物の全壊は53棟であったという。
1909	同 42. 3. 13	千葉・神奈川	横浜の被害が激しく、煉瓦壁や煙突が崩れたという。
1915	大正4. 11. 16	千葉	下香取郡と長生郡などで崖崩れ。負傷者5人、家屋等の倒壊がみられたという。
1922	同 11. 4. 26	千葉	【浦賀水道地震】東京湾沿岸に被害。死者2人、民家にも被害があったという。
1923	同 12. 9. 1	関東一帯 〔鎌倉〕	【大正関東地震】東京都・神奈川県・千葉県・茨城県のほか静岡県東部にまで甚大な被害を及ぼした。鎌倉と横浜が激甚といい各所で地割れを生じ、建物の倒壊や火災の発生・広範囲にわたる延焼があった。また、津波が相模湾沿岸に襲来し、鎌倉では材木座や坂ノ下などが広く浸水した。全体で105,000人余りが死亡あるいは行方不明になったとされる。神奈川県の被害は、死者29,000余人、行方不明2,000余人、負傷者19,000余人、家屋全壊約47,000棟、全焼約69,000棟、流失約400棟などである。 鎌倉大仏が前（南）に約45cm移動した。
1924	同 13. 1. 15	東京・神奈川・山梨 〔鎌倉〕	【丹沢地震】神奈川県西部で発生。大正関東地震後の最大の余震か。死者19人、負傷者638人で、損失家屋は住家全壊約1,200余棟、ほかに倉庫や納屋などの全壊は約6,000棟等であったという。鎌倉でも建物等に被害あり。 鎌倉大仏が後に約30cm戻った。



元禄関東地震の一例

江戸状案詞（内藤家文書） 一冊 元禄 16 年（1703） 明治大学博物館蔵

光明寺檀方の譜代大名内藤家に伝わった、国許などから同家江戸屋敷に宛てた書状の写し。本書は、元禄 16 年 12 月のものである。鎌倉材木座の光明寺にある同家の墓所のほか、「御霊屋」「書院茶之間・台所」での地震による被害や、「浜屋敷」の津波被害などについての記述がある。そして、同寺境内のことも少し触れ、本堂と境内の諸建物に破損があったと伝えている。

（内容）

- ・内藤家御霊屋（鎌倉光明寺にあった、私的な慰霊堂的な建物）の内部で本尊観音菩薩像の御手が少し破損したほか、古仏や同家の位牌も少し壊れました。
- ・（光明寺にあった）同家御書院の茶の間と台所は全壊し、戸や障子などはすべて破損して使用不能となりました。
- ・同家「内御仏壇」の本尊阿弥陀如来像ほか、仏像などがそれぞれ少しずつ破損しました。
- ・光明寺方丈内の仏壇にある同家の位牌は、無事でした。
- ・光明寺の本堂が破損したほか、境内も損じたようでした。
- ・同家「浜屋敷」では、津波で漁船が 2 艘打ち上げられて、同屋敷の長屋に当ってその建物が破損。さらに、同屋敷の建物も過半が傾斜しました。また、「塩」（海水）は昼より 30 cm ほど上がったようですが、詳細は不明です。
- ・これら以外にも、光明寺の本堂が破損したほか、寺の中でいろいろなものが破損いたしました。



内藤家「浜屋敷」推定位置図

烈震史料まとめ(古記録から)

- ・平安時代から大正 13 年まで 123 件(回)
- ・うち、烈震が 3～4 年にわたって頻発したのは 8 回
(2 年以上継続したものは 12 回)

烈震が発生した間隔については史料にばらつきがあるため、現時点では不明と言わざるを得ない。

(記録が比較的残っている鎌倉期でも、短いもので 4 年から 12 年、長いものでも 26 年と、地震が発生した間隔は一定ではない)



大正関東地震 (1923) での材木座の被災状況 (航空写真) 防衛省防衛研究所

富士山噴火の歴史

延暦噴火（800 年・平安時代）

延暦 19 年 3 月 14 日（西暦 800. 4. 11）から 4 月 18 日にかけてと、2 年後の 1 月 8 日に噴火した。旧東海道の相模国足柄路が一次閉鎖され、一時箱根路が代わりとなったという（『日本紀略』）。

貞観大噴火（864～866 年・平安時代）

貞観 6 年から同 8 年（864～866）、富士山の北西斜面（現、長尾山）より大量の溶岩を流す噴火が発生した。流れ出た溶岩の一部は大きな湖（せの海）を埋めて西湖と精進湖に分断した。

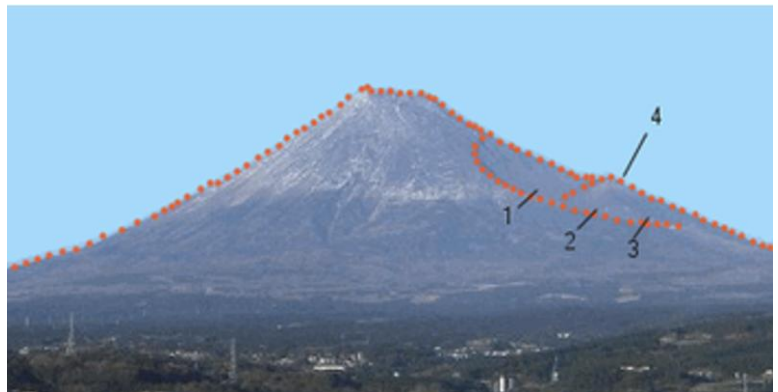
宝永大噴火（1707 年）

宝永 4 年（1707）大量の火山灰などを噴出した大噴火であった。この噴火は宝永南海地震の 49 日後に始まり、相模国のほか、江戸市中まで大量の火山灰を降下させた。

噴火の 1～2 か月前から山中のみで有感となる地震活動が発生し、十数日前から地震活動が活発化した。そして、12 月 16 日（西暦）朝に南東山腹（現、宝永山）で大爆発を起こし、黒煙、噴石、降灰があり、激しい火山雷が発生したという。また、その日のうちに江戸にも多量の降灰があり、江戸近郊で 5 cm 程積もっている。山麓で家屋や耕地に大きな被害があり、降灰によって、洪水等の土砂災害が継続した。当時の史料では「砂降り」「降砂」などと記載されており、宝永 4 年が亥の年であったことから、「亥の砂降り」とも呼ばれている。（静岡県富士宮市HP）

南から見た富士山の宝永火口、火口の位置

- 1（第一火口）
- 2（第二火口）
- 3（第三火口）
- 4（宝永山）



宝永富士山大噴火の湘南方面の火山灰被害（鎌倉・藤沢方面）

- ・鎌倉・藤沢の村々：麦作がほぼ全滅し腐った。
- ・腰越・片瀬両村（現、鎌倉市・藤沢市）：田畑に五寸程（約 15 cm）火山灰が積もった。
- ・津村・腰越両村（現、鎌倉市）：行合川など、^{ゆきあいがわ}当地の 4 河川が地震で川筋が変わり、噴火で付近の田畑の降灰及び降砂の処理が限界を超えた。
- ・江島村（現、藤沢市）：降砂のための不漁となった。
- ・高座郡羽鳥村（現、藤沢市）：火山灰の厚みが八寸～一尺（25～30 cm 位）で、大量であるため田畑の内に捨てる以外方法がないと伝えた。

南北朝～戦国時代の富士山噴火（参考）

火山灰層：13 世紀末～14 世紀初頭	『昭和 53～62 年度 称名寺庭園苑池保存整備報告書』		横浜市教委（1988）	
応安 4（1371）2. 1	この日は大雪で、（山々など）一帯が白かったが、富士山のみ雪がなかった。そして箱根（方面）の山から「蒼煙」が上がっていた。	『空華日用工夫略集』	橋本虚舟（2009）	
永和 1（1375）	「富士の根の絶えぬ煙にくらばや 我下もえにくゆる思ひを 権大納言公長」（1375 年噴煙をあげていたようである）	『五百番歌合』	つじ（1992）	
応永 34（1427）噴火？	「応永三十四年六月四日（1427 年 6 月 28 日），富士と浅間虹口吹き」	『信濃国浅間嶽記』	八木（1936）・武者（1941）	信頼性は低い
応永 30 年代の火山灰層か	応永 32 年（1425）の極楽寺における火災面の上に堆積した火山灰層。同年以降から左程隔たらない時期のものと推定される。	極楽寺旧境内遺跡	鎌倉市教委（1980）	
永享 5～7（1433～35）頃噴火 【P. 2 参照】	「永享十一年己未（中略）同五年癸丑九月十六日夜大震動シテ六地藏コロフ、同七年乙卯ニ富士ノ火炎見ヘタリ」	『王代記』	清水・服部（1967）	信頼性が高い
	火炎望見記事の直前にある「同五年癸丑九月十六日夜大震動シテ六地藏コロフ」という 1433 年 10 月 28 日の地震記事は、伏見宮貞成（さだふさ）親王の日記『看聞日記（かんもんにつき）』に、京都で有感であったこと、鎌倉に大被害があったことが記載されている。		小山（2007）	
文明 17（1485）の漢詩	「静勝軒」（太田道灌の江戸城）の項「…主人窓置博山對 一縷吹残富士煙」	『梅花無尽蔵』	つじ（1992）	
明応 8（1499）. 6 の記	「おもひたつふじの煙もたち花の なびく煙にまつやしるらん」（飛鳥井が京都を立ったすぐ後から富士が噴煙がたなびいていたのかという問いに、見聞録として返した歌）	『富士歴覧記』 飛鳥井雅康	つじ（1992）	
永正 8（1511）の噴火	「永正八辛未（中略）此八月大原へ天狗共寄テ三ヒ時ノ声ヲ作ル也、村ノ人々皆舌スクミテ物云事アタハス又富士山ノカマ岩燃ル也」	『妙法寺記』	『勝山記』（都留市史資料編に収録）小山（2007）	信頼性が高い
火山灰層：14 世紀初頭～16 世紀初頭	『昭和 53～62 年度 称名寺庭園苑池保存整備報告書』		横浜市教委（1988）	
永禄 2（1529）頃の噴煙の記事	かつて駿河国丸子柴屋寺（さいおくじ）に住した宗長の日記 「朽ぬ名をふじの高ねにとどめても 煙になして見るぞ悲しき」	『宗長日記』	つじ（1992）	

参考文献

小山真人 2007『富士山歴史噴火総解説（第 2 版）』静岡大学教育学部総合科学教室
 つじ よしのぶ 1992『富士山の噴火一万葉集から現代まで』築地書館
 八木貞助 1936『浅間火山』信濃教育会
 武者金吉 1941『増訂大日本地震史料』第一巻 文部省震災予防評議会
 鎌倉市教育委員会 1980『極楽寺旧境内遺跡発掘調査報告書（稲村ガ崎小学校）』
 清水茂夫・服部治則 1967『武田史料集』新人物往来社
 横浜市教育委員会 1988『昭和 53～62 年度 称名寺庭園苑池保存整備報告書』
 橋本虚舟 2009「徧界一覽亭」『鎌倉』108 鎌倉文化研究会

元禄関東地震の被災状況と、宝永富士山噴火後の復興について（概要）

小田原藩の例

小田原藩の藩領の拝領高は11万5,000石であった。元禄16年（1703）の大地震とその際の出火の被害で、城廻り・家中屋敷から町郷にいたるまで壊滅的な打撃を受け大借財を抱えた。さらに、宝永4年（1707）の富士山噴火による「焼砂吹出」の被害で、相模国（神奈川県）・駿河国（静岡県）・伊豆国（同）領分の内5万6,000石余が亡所（荒廢地）となり、^{ふじき}夫食（救済用食料）などの手当てで多大な出費がかかった。

^{じょうち}上知（藩領から幕府領に移管）など、幕府の手で復旧工事を行った後、享保元年から延享4年（1716～1747）には復旧が終えたようであった。しかし、噴火以前の収納と引き合すと、1万120石の減少となったという。

（参考：馬場弘臣 2014「元禄大地震と宝永富士山噴火 その1—相模國小田原藩の年貢データから—」『文明』No. 19）

鎌倉の例

〔覚園寺〕

本尊薬師如来坐像の、像内から発見された宝永元年（1704）の修理銘札によると、大地震で仏殿をはじめ諸堂宇が傾斜あるいは大破し、尊像が破壊されたので、同年の夏から秋にかけて薬師如来坐像と日光菩薩・月光菩薩^{がっこう}両坐像、十二神将立像（全て現重要文化財）の修理が行われた、とある。このことからすると、宝永元年中に境内諸堂とこれらの諸像が修補された。

〔円覚寺〕

本堂と^{はいどう}拜堂の^{きだん}基壇が裂けて泥水が涌出し、堂内の仏壇が崩れて本尊が泥中に落下した（液状化現象か）。そして、堂塔、方丈、^{じけ}寺家等が山の崩落により壊滅したという。のちに大正関東地震で倒壊した同寺仏殿の^{ほぞ}柱枅の墨書から、同仏殿が元禄関東地震で倒壊したことや、復旧に3年を要したことが明らかとなった。

〔鎌倉大仏〕

尊像の台座が傾き、台座前方の石壇も崩れて、像が約90cm下に傾いた（大正関東地震では、大仏は像全体が約45cm南（前面）にせり出し、台座の右後ろ側が約9cm、前側が約45cm地中にめり込んだ）。

地震後、祐天上人による復興が行われ、正徳2年（1712）に江戸浅草の野島新左衛門の寄進を受けて、台座周囲の土地を買上げる等境内整備を行った。そして、その年の3月15日には高德院の堂舎も落成し、入仏供養が執行された。

〔円応寺〕

材木座の沿岸部に所在したが、この地震による津波で大破（当地の推定海拔高は3、4m程）。その場所での再建が不可能となり、紆余曲折を経て山ノ内小袋坂上、建長寺の斜向かいに移転した。

巨大災害の周期

・13 世紀代の大災害頻発期(?)

(これ以降、江戸時代までは詳細不明な時期となる)

・18 世紀初頭の大災害頻発期

元禄東海地震 (1703) 相模トラフのプレート境界

宝永南海地震 (1707) 南海トラフのプレート境界

＊宝永富士山噴火 (1707)

・19 世紀半ばの頻発期

安政東海地震 (1854) 南海トラフのプレート境界

安政南海地震 (1854) 南海トラフのプレート境界

＊安政江戸地震 (1855) 江戸直下型

・20 世紀四半期

関東地震 (1923) 相模トラフ野プレート境界

・現在

参考資料

- ・浪川幹夫 2006.12 「近世鎌倉大仏の修理と明治維新」 『鎌倉』 102
- ・同 2013.2 「中世鎌倉の烈震と復興—鎌倉時代末期から戦国時代の地震災害と復興の姿—」 『鎌倉』 114 号
- ・同 2013.3 「第7章 鎌倉方面における元禄地震」 『1703 元禄地震報告書』 元禄地震の災害教訓の継承に関する検討会 (内閣府)
- ・同 2014 「鎌倉における明応年間の『津波』について」 『歴史地震』 第29号 歴史地震研究会
- ・内閣府 2006 『1707 富士山宝永噴火報告書』

他

～宣 伝 で す～

「鎌倉シチズンネット(KCN)」 (IT 支援 NPO 団体による生活情報や観光情報のページ)

↓

「e- ざ鎌倉・IT タウン」

↓

読み物等

[連載記事など]

・ 知られざる鎌倉探索 ← 見てください

内容 : 「鎌倉御用邸」 「加賀百万石の別荘」 「三橋旅館について」 「鎌倉文士村ができたわけ」

「関東大震災の鎌倉」 「古き鎌倉再見 (古写真紹介)」 です